

あいち病害虫情報 最新情報

平成 27 年 4 月 17 日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

ムギ類赤かび病防除

ムギ類赤かび病の感染予防のための防除適期は、開花期です。今後、赤かび病の防除適期を迎えるので、天候の推移に留意して、適宜防除を進めましょう。

詳細は、本日発表の「ムギ類赤かび病情報第2号」を参照してください。

水稻の育苗期防除

普通期栽培の播種作業が始まります。次の点に注意して適正な種子消毒に努めましょう。

- 1 細菌性病害にも効果のあるテクリードCフロアブルなどを用いて、種子消毒を行いましょう。
- 2 浸漬処理法の場合、薬液温度は15～20℃とし、処理濃度と時間を守り、処理後、種子に薬剤を十分に付着させるためによく風乾しましょう。
- 3 温湯種子消毒の場合、適切な処理温度、時間（例：60℃、10分）を守りましょう。
- 4 高温での浸種や長時間催芽は細菌感染を助長するので避けましょう。
- 5 出芽温度は30～32℃を守りましょう。
- 6 種子消毒後の廃液は、適切に処理しましょう。浸漬処理後の廃液処理が困難な場合には、種子粉衣（湿粉衣法）や塗沫法などの消毒方法に切り替えましょう。また、エコホープDJなどの微生物農薬や農薬温湯種子消毒を利用する方法もあります。ただし、微生物農薬による種子消毒は、薬液の温度が10℃以下では効果が劣りますので、処理温度に注意しましょう。
- 7 種子消毒後は病原菌の汚染がないよう管理しましょう。

ナシ黒星病 多発のおそれ！

ナシ黒星病は、4月上旬の発病調査で過去10年と比べて2番目に多い発生状況でした。またその後も降雨が続きましたので、多発するおそれがあります。昨年の発生が多かったほ場では、特に注意しましょう。

落葉果樹の病害虫

長久手市でナシ赤星病の発生を、すでに確認しています。開花後の防除を実施していない場合は、黒星病などとともに防除しましょう。

ナシヒメシクイの越冬世代成虫のフェロモントラップによる誘殺数は平年並で、発生時期はおおむね平年並です。越冬世代成虫は展葉したモモの葉に産卵し、ふ化した幼虫が新梢に食入して芯折れを引き起こしますので、防除適期を逃さないようモモハモグリガと

ともに防除しましょう。

モモのせん孔細菌病の発生が昨年多かったほ場では、感染を防ぐため薬剤防除を徹底し、春型枝病斑は見つけ次第、取り除きましょう。

モモハモグリガの越冬世代成虫のフェロモントラップによる誘殺数は、おおむね平年並です。しかし、第一世代ふ化幼虫の防除適期を逃すと、その後の世代は生育ステージがばらつくため、防除が難しくなります。フェロモントラップによる誘殺状況とモモの生育ステージに留意し、適期防除を心がけましょう。

果樹カメムシ（チャバネアオカメムシ）の飛来数は、越冬成虫量からおおよそ予測できます。今年（令和7年）の果樹カメムシ（チャバネアオカメムシ）の越冬成虫量は、平成23年、25年に並んで過去10年で8番目に少なかったため、6月下旬までは果樹カメムシ類の飛来数はやや少ないと予測します。詳細は、4月6日発表の「果樹カメムシ情報第1号」を参照してください。

果菜類の病害虫

ナスでは、灰色かび病の発生がやや多い状況です。同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション防除を心がけましょう。被害部は新たな伝染源となるので、早期除去に努めましょう。

ウイルス媒介虫を施設外に出さないようにしましょう！

トマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病の防除対策の基本は、ウイルス媒介虫を、施設内に入れない、施設内で増やさない、施設外に出さないの3つです。

特にこの時期は、次作の感染源を減らすため、トマトでは収穫終了後、残さを持ち出す前に施設を密閉して、トマト黄化葉巻病ウイルスを媒介するタバココナジラミを死滅させましょう。

キュウリでは、収穫期間中、キュウリ黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底しましょう。

- 農薬は安全な場所に鍵をかけて保管しましょう。
- 防除の際は、周辺作物に飛散しないよう注意しましょう。
- 農薬散布後は、防除器具のタンクやホースも洗いもれがないようにしましょう。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-62-0085 FAX 0561-63-7820